

馬場久幸著 『日韓交流と高麗版大藏經』

織 田 顕 祐

どのような方法で仏教を研究するにしても、仏教研究の基礎は、言うまでもなく文献講読に始まる。特に漢文經典は漢字文化圏の仏教を学ぶにあたって必須であるばかりでなく、全ての分野の仏教研究に欠く事のできないものであると言える。その場合、今日我々が標準としているのは言うまでもなく『大正藏經』である。『大正藏經』は今日では、テキストデータベースとしてインターネット上に公開されているから、印刷物しかなかった時代以上に、世界中で広く様々な用途に活用されているだろう。

現実にはいくつかの問題を抱えながらも、『大正藏經』は一般的な標準として、それをよりどころに思想研究が行われている。その場合、対象としている文献のテキスト的な正確さはその前提であろう。その『大正藏經』は、東京上野の増上寺所蔵のいわゆる『高麗大藏經』を底本として、宋・元・明版を対校したものであることはよく知られている。また、『高麗大藏經』には二種類の影印があり、それをネット上で簡単に参照することもできる。しかし、当の『高麗大藏經』にこんなにも多くの課題が有るとは、本書を読むまで全く知らずにいた。まずは本書をまとめ上げた著者の努力に敬意を払いながら、内容を紹介し若干の批評を加えたい。本書は序章と四章の本文、二つの附録によって構成されているので順に取り上げていく。

## 序章 研究の目的と研究成果の整理

日・韓におけるこれまでの研究成果の概括的な紹介である。かなり詳細にわたっており、この問題についての全貌をほぼ把握することができる。特に韓国の研究成果が日本語で紹介されている点が有意義である。この中で特に注意すべき点は、日本において高麗蔵が注目され始めたのは室町時代に入ってからであり、それが善本だと認識されたのは江戸時代に順芸などが黄檗版と対校したことに起因するという指摘である。また、韓国内には高麗蔵の古印本が存在しないという事実も歴史的な意味で重要である。さらに近年日本では高麗蔵を含む大蔵経研究が進んでいないこと、また韓国における研究成果が参照されていないとする点も重要な指摘である。

## 第一章 日本所蔵の高麗版大蔵経

日本に伝来した高麗蔵経の概要を調査し、その主なものの印刷年代を推定している。室町時代に伝来した高麗蔵はおよそ四十から五十蔵に及ぶとされ、現在我が国にまとまって所蔵されている高麗蔵を紹介している。それらは、増上寺蔵、輪王寺蔵、建仁寺蔵、南禅寺蔵、相国寺蔵、金剛峰寺蔵、法然寺蔵、長崎安国寺蔵、対馬長松寺蔵など十二蔵に及ぶ。その他に、神社所蔵のものを三件取り上げている。このうち厳島神社所蔵のものが現在大谷大学に所蔵されている。

第二節では、大谷大学所蔵本を紹介する。同本は「李穡」の跋文を有する点に特徴があり、この跋文の内容を検討して大谷大学所蔵本が非常に古い時代の印出であることを論証する。さらに第三節ではこの結果に基づいて日本に現存する主な高麗蔵の印刷年代を推定する。これは諸版における印字の同異を詳細に調査した結果である。はじめに大谷大学所蔵本と増上寺本とを比較して、大谷大学本には印刷されているが、増上寺本には欠字となっている幾つかの具体例（九例）を取り上げ、現存する海印寺の版本を確認して、その理由を一つ一つ検討している。この調査は著者

の考えてによって選定された四十九の經典を比較した結果であるとする（一一四頁）。著者はこの調査によって、大谷大学本の印刷時には埋め木によって補正された部分が、後に欠落し増上寺本が印刷されたと推定している。この調査に基づいて、現在印刷年代が不詳となっている相国寺本などの印刷年代を推定して、大谷大学本↓建仁寺本↓増上寺本（＝相国寺本）↓法然寺本↓泉涌寺本の順であると結論づけている。

また室町時代に高麗大藏經が多く輸入されたのは、不安定な政治状況による民心の不安を昇華するのが目的であったと指摘している。

## 第二章 室町時代の高麗版大藏經の受容と活用

本章では、より具体的に室町時代には將軍家を筆頭に四十四藏がもたらされたことを指摘する。それは、南北朝の激しい争いの後に幕府を開いた足利氏が、禪宗の教えを拠りどころとして領国の安寧を祈願するために大藏經の転読を盛んに実施し、そのために大藏經が必要だったからであると指摘する。また將軍の誕生日祈祷という新たな行事が始まり、それも具体的には大藏經を転読して將軍の息災を祈願するものであった。こうした理由によって、仏力で外敵退散を祈願するために雕造された高麗大藏經の験力が期待されたのである。そして、この時代はまだ大藏經によって仏教を研究するといった発想はなかったと結論づけている。

第二節では、南北朝時代末期の明德の乱の戦死者の供養として足利義満によって発願された北野社一切經と高麗大藏經の関係が整理されている。

第三節では、琉球国と高麗大藏經の關係に触れている。琉球国で仏教が盛んだったのは、十五世紀の半ばから十七世紀末の約百五十年間であるが、その間に五回も高麗大藏經が將來されている（二〇二頁）。琉球の仏教受容については、普段あまり目にするのではない課題であり、事実の指摘だけでも大いに参考になる。ただ、琉球尚泰久王の仏教

受容について、わずか一例の先行研究の紹介だけで結論づけているのは若干性急すぎるように思われる。

### 第三章 江戸時代の高麗版大蔵經の活用

宋の開宝蔵から約六五〇年もの時間を経た近世に至って、ようやく大蔵經が刊行されるに至った我が国の事情を検討している。我が国最初の大蔵經は、一六四八年に刊行された天海版である。それ以前にも宗存によって企画されたことがあるが、これは中途で終わっている。そしてこれらはいずれも木活字を用いて印刷された点に特徴がある。

宗存版は、大蔵經を開版して伊勢神宮に奉納し、鎮護国家と現世と来世の安樂を得ようと慶長十八（一六一三）年に企画されたものであることを紹介する。その中で宗存の『一切経開板勸進状』を引用しながら動機を明らかにしようとして（二三六頁）、重要箇所①から④の傍線を引いて解説を加えている。ところが引用文中の傍線を、本文では「下線部①」と指示しているので当初は何を説明しているのかかなり戸惑った。編集上のケアレスミスと思われるが、かなり後にも同様の表記があり（二四二頁）、そこではよほど注意しなければ文意を読み取ることができない。結論は、宗存版には高麗蔵の刊記を模倣していると見られる箇所があり、高麗蔵を底本としたことが知られるとする点である。天海版については、使用された木活字が現存していることを触れるのみで、底本などに関する言及はない。

本章では、我が国で開版された初期の二つの大蔵經がいずれも木活字を使用している点について、再三再四「莫大な費用を抑えたい」（二三五頁、二五一頁など）と指摘しているが、そのように簡単に結論づけることが可能であろうか。我が国の木活字印刷の歴史については、豊臣秀吉の朝鮮出兵の戦利品として朝鮮から銅活字印刷本が将来される（文禄二（一五九三）年）、それを手本として木によって模倣したことを初めとする。そして、民間の活字印刷本として現存する最古のものが文禄四（一五九五）年十一月版の『天台四教義集解』であること、また木活字版は慶長年間から寛永までの約五十年が最盛期で、寛永末には激減したことが先学によって指摘されている。木活字印刷は版組の

不安定さや使用後にその都度活字を洗浄しなければならないなど、大量出版には不向きであつたために比較的短い間に木版印刷に戻っていったのである（弥吉光長著『江戸時代の出版と人』（同著作集三）三五―三八頁参照）。

こうした時代背景を考慮に入れるならば、宗存版は我が国における木活字印刷の全盛期に企画され、天海版は木活字印刷が終焉を迎えつつある時に開版されたことになる。天海版は三代将軍家光の絶大な援助を受けたにもかかわらず木活字を用いているのであり、後に木版による鉄眼版なども出現する。こうした点を念頭におくならば、我が国における最初の大蔵経開版がいずれも木活字を用いたのは、時代的な影響が強かつたのではないかと考えられるのである。宗存版の木活字印刷の問題を費用削減の面のみで理解することはできないのではなからうか。

次に江戸時代における高麗蔵重視の例を「表2」としてまとめているが（二六一頁）、この表の意味がよく理解できない。著者の意図としては、ここに示した一三の例がいずれも高麗大蔵経を用いて開版もしくは対校されていることで高麗蔵が重視されたことをまず示し、これら一三の例がいずれも浄土教関係典籍であり、なおかつ浄土宗の学僧によつてなされたものであるから、幕府と関係の深い浄土宗において典籍研究が進展したということのようである。しかし、ここに示された一三の例が、当時の仏教文献全体の中で一体多いのか少ないのか、当時の全体像が掴めないのでもともと理解しにくい。因みに前述した『江戸時代の出版と人』によれば、寛文十一（二六七）年刊の『新版増補書籍目録』によつて、合計で三八七四部、そのうち仏教関係の典籍が一六四九部を占めていることを知ることができる。これが一年間の数字であるか否か評者には直ちに判断できないが、相当な数であることは了解できよう。それ故、著者が示している一三例が全体の中でどれほどであるかが分かなければ、重視された云々の判断はできないと思われる。また、延享五（一七四八）年刊の『無量寿経鈔会本』について「この經典は高麗蔵には入蔵していないが」と述べている箇所や、文政元（一八一八）年刊の『観経疏伝通記』について同様に「これは高麗蔵にはない」と述べる箇所などは、当該典籍の素性を無視した表現のように思われ、著者の意図が理解しにくい。さらに最後にあげ

る「浄厳」という僧は、本文を読む限り浄土宗とは関係がない。それ故、表2の結論として、浄土經典が多く出版され、それは幕府の援助による関東十八檀林の設置と関係が深いとするのは、若干性急に過ぎると思われる。

#### 第四章 高麗版大藏經の影印本と版本

現在「東国大学校本」「東洋仏典研究会本」として二セット存在する高麗藏經の影印版に関する追跡調査の報告である。第一章において、著者が苦勞して明らかにしたように、現存する高麗大藏經の版本と版本には当初からの様々な問題があった。二つある高麗藏影印版は、こうした問題に関する書誌学的な検討を加えることなく、明確な方針のないまま、記念事業として影印出版が開始されたようである。著者はこの点を踏まえながら、具体的に現物を調査することによって、両セットの原版と出版意図ならびに両セットの異同を解明しようとする。

東国大学本は一九五七年に影印出版が開始され、一九六〇年代前半と一九七〇年代前半の二回の活動不明瞭な時期を経て、一九七六年に突如として完結している。また東洋仏典研究会本は東国大学本の出版が不明瞭な時期と並行する一九七一年に刊行が開始され、東国大学本の完成の前年である、一九七五年七月に出版を完了している。著者はこの両者の微妙な関係には立ち入っていないが、状況的には何か必然的な関係がありそうである。

著者の綿密な調査によって、東国大学本は一九一五年の版本調査の際に確認された欠字（二〇一七字）を金属活字で修正した箇所があること、一九六三年実施の版本調査では欠字箇所は相当数増えているが（四六七七字）、一九一五年調査と同一の典籍（例えば大般若經）ではほぼ同じ箇所が確認されていることなどを明らかにしている。一方、東洋仏典研究会本はそれらの欠字を全て木活字で補っており、さらに各冊内題の横に「大正八年十二月二十六日 伯爵寺内正毅寄贈本」の印が押されていることから、大正四（一九一五）年に当時の朝鮮総督であった寺内正毅が明治天皇の冥福を祈願して三部印刷したもの的一部であることを明らかにした。さらに、三部は宮内庁、泉涌寺、ソウル大学

に奉納されたことから、東洋大学研究会本は、ソウル大学本を底本としていることが明らかになった。一方東国大学本は、欠字等の調査では底本の印刷年代や金属活字による補修の意図・編集の方針などを明らかにすることはできず、今後の検討が必要であると結論づけている。著者は、相当な量の現物調査をされたようであるが、明確な編集方針のないまま出版されたものを後付けで調査し、実態を解明することの困難さを示しているように思われる。

附録として、Ⅰ高麗版大藏経関係研究文献目録（日本と韓国に分けられている）とⅡ高麗版大藏経と大正藏経の五十音順対照目録（高麗大藏経影印二種と大正藏経の各典籍を対照したもの）を付している。Ⅰの研究文献目録は当該分野の先行研究を網羅的に示している点で、研究者に益する所が大きい。データを日本と韓国に分けて整理しているのも使いやすいと思う。ただ、配列が全て刊行年度順であり、同じ著者の論文が年度ごとに掲載されている。著者別索引がないので、配列は著者別の年度順にした方が使いやすいように思われる。Ⅱの対照目録も有益なものであるが、高麗藏経の典籍名を見出し語として五十音順に並べかえ、大正藏と対照しているので、例えば「法華経」は「ホ」からは引けず、「ミ」（『妙法蓮華経』）を見なければならぬ。同様に「華嚴経」は「ケ」から引けない。逆に「仏説無量寿経」は「ブ」からは引けず、「ム」（『無量寿経』）を見なければならぬ。このように典籍名を見出し語とする時は、正式名でも通称でも一方だけでは引きにくいものである。本書は高麗藏に関する著書であるから、高麗藏を基準にするのは当然であろうが、実際の使い易さから言えば大正藏を見出し語にした方が良かったと思う。

以上の他に、本書には全体にわたって同じ既述の重複が多々見うけられる。また、既に述べたことを「後述する」と言っているような箇所もある（一七二頁など）。更に、一々指摘することは避けるが、文脈が乱れているのではないと思われる箇所も存在する。これらは異なる時期に書かれた論文を編集して一冊にする場合、特に注意しなければならぬ点である。こうした課題を含んでいるが、本書は、現存する各種の高麗大藏経を実際に丁寧な調査し、多くの重要な点を指摘していることは他に類例がない。また高麗大藏経に関する研究史の総括や、網羅的な研究リスト

を挙げるなど、高麗大藏經に関する客観的な調査報告としては大きな意義を持つものであり、今後当該の研究分野においては必須の書であると言いうことができる。

(二〇一六年二月、法蔵館、vi + 三三三 + 八八頁、ISBN 978-4-8318-7396-5)